

私が移住した1994年頃のニューヨークは、現代美術がオークションで全く売れないという不況の時代だった。歩いてみると写真、ビデオ、インスタレーションが全盛であった。

やがて画廊街がソーホーからチェルシーに移動し、絵画の復権ということが言われ始めた。最初は1997年夏のモマ、プロジェクト・ルームでのジョン・カリン、エリザベス・ペイトン、リュック・タイムンス3人展で、写実絵画見直しの動きが新しいスターを登場させる。次いで1999年、メアリー・ブーアの「ダミアン・ロップ展」「笑いものだった絵画の復権」と私はタイトルしたが、写真に基づいたフォトリアリズム風の絵画。高校中退の若者は数日で全作品を売り尽くした。1999年秋にはブルックリン美術館で「センセーション」展が開かれて、大きな話題になる。この時は、象の糞を画面に貼り付ける黒人画家、クリス・オフィリが話題の中心になったが、このロンドンのコレクター、チャールズ・サーチ氏が持って来たロンドンの恐るべき子供たち、YBA(ヤング・ブリッティッシュ・アーティスト)の中心は、牛の輪切りや、サメをホルマリン漬けにするデミアン・ハーストだった。けれどその中には具象の画家がかなり含まれていて、サーチ氏がコレクションしていた。例えばその中の1人シリィ・ブラウンは絵画復活の動きの中で旗振りの役割を果たしたとされ、かのガゴシアン画廊で個展を開いた(彼女の作品はほとんど抽象表現主義に見えたが)。けれども、このグループで後に活躍が目立ったのはハーストの他にはネガティブスペースの彫像を作るとされる彫刻家レイチエル・ホワイトリッドなどコンセプトチュアルの作家で、今では具象の画家たちの影は薄いのではないか。

今年3月、チェルシーのメジャー画廊ベースではトラ・ドノヴァンの個展で、ピン・ドロインと称する一見シンメトリックな幾何学的パターンの作品だが、ピン(釘)を打って構成されており、新素材優位を典型的に示している。また別の画廊では熊や狼をテーマにした巨大な単色の素描と見えたが、近づいて見ると線は筆記の英文字で出来ていた。ありふれていると思うが、今日のアイデア優先的傾向を示している。具象抽象何でもありだが、しかし直近の美術史の文脈に沿った、例えば異質の素材やイメージをコンパインするような、見慣れた形式ばかりなのは、コレクターが安心できるものしか買わない不況の

ニューヨークの
アートシーン

絵を描いたらお仕舞い?



日影 眩



チェルシー、ウエスト24丁目と一掃に歩いたアートディレクター、アン・ドレア 2011



春のソーホー、ウエスト・ブロードウェイ 2011

時代を反映しているからだろう。

一方、モマもそうだが、今日の美術館では、日本の「グタイ」のようなタダの・反芸術的傾向のアートへのグローバルな掘り起こしと、再評価が盛んなように見える。この事は新しいアートが生まれぬ袋小路的状况を逆照射する。

26年前も前、ヨーゼフ・ボイスは「私のところには美術館からほとんど声がかかるが、画家には全く声がかからない」とミヒャエル・エンデとの対談で豪語した*。今のニューヨークでも画家たちにとって時代は悪い。マーケットでは、ハイブ(誇大宣伝)と叩かれる3人が、オークションの高額落札で話題を集めるが、彼らは皆アシスタントに絵を描かせる。描く能力は、ピラミッド建設に動員される奴隷の労働力と同じ位置に貶められている。

人間にとって大事なものは人間だとルイス・マンフォードは述べている**。人間を歯車の一つに貶めるのは、古代エジプトに匹敵する権力複合体「アメリカであると。今度の福島原発事故やヒロシマ・ナガサキも、そのメガマシ(巨大権力複合体)がもたらした大惨禍である」と見ることが出来る。

ポストモダンアートは、オリジナリティ、天才、ユニークネスを意味のないものにしたとニューヨークの大学院では講義している。その動向は文明の必然だろうか?

異なったカルチャーのもとではそれは異なった道筋を辿るのではないか?

私たちは西洋に迎合すべきではなく戦うべきだ。

* 「芸術と政治をめぐる対話(エンデ全集16)」岩波書店2002

** 「権力のペンタゴン」ルイス・マンフォード 河出書房新社1990

日影 眩(ひかげん) 画家

兵庫県生まれ

法政大学文学部哲学科卒業

1994年よりニューヨーク

在住

2000年「日影 眩の30のニ

ューヨーク」出版

2011年池田20世紀美術館で個展



日影 眩展 ～フログズ・アイの30年～
2011年6月30日～10月11日
池田20世紀美術館 会場